



研究ノート
【絵画】

「私にとっての噴火湾文化研究所同人展」

「野田・永山塾」塾生 松永 瑠利子 氏



1. 同人展を通して

「存在の美学—伊達市噴火湾文化研究所同人展」とは、写実絵画表現による「真実」「存在」の本質的なリズムの追求を目指す噴火湾文化研究所同人である野田弘志、永山優子、廣戸絵美の各先生方が中心となり、毎回同人作家が注目する作家を招き、同じ会場で各々が表現し写実についての意識を高め合う展覧会です。隔年で開催しており、昨年2014年には「存在の美学—伊達市噴火湾文化研究所同人展」第三回展を迎え、東京・大阪・伊達・札幌を巡回し多くの人に足を運んでいただきました。私もその第三回展に招待作家として展示させていただき貴重な体験をすることができました。

同人展に出品するまでは、『野田・永山塾』の研究生として自分の作品を黙々と描く日々でした。普段制作している時は先生方から技術面などの細かい指導は特になのですが、「どうしてこれを描こうと思ったのか?」「何を感じ考えながら描いているのか?」「本質とは何か?」「美とは何か?」など問いかけをしてくださり、その問いかけで自分が今まで気付けていなかったことに気づき考え、絵は教わるものではなく自分自身で作っていくものだということを実感しながら制作していたのですが、同人展に出品したことで研究生ではなく一人の画家であるということを実感せざるを得なくなりました。私が描いたものが私自身として人に見られる。つまり作品にも制作する姿勢にも責任を持って取り組まなければならないと、自分がやっている仕

事の重要性について考えさせられる出来事となりました。しかしその仕事は鑑賞者に媚びるような一般的に好まれる「単なる快いだけの美」として描きたくはないと思っています。その対象が放つ美しさを真摯に見つめること、そしてデフォルメすることなく、そこにありのままに存在する形を描いていきたいと思っています。また、対象から感じる美とは何なのか、それと同時にその対象を目の前にして美しいと感じている自分という存在とは何なのか考え、対象と自分との繋がりを時間をかけて深めていき、作品＝私の生きた証として残していけるような仕事にしていきたいと思っています。

2. 作品について

今回同人展には「頭蓋骨」と「鳥」の二つの作品を出品しました。どちらも死んだ後に残った形なので、「死」を連想しやすいものですが、一年という長い時間、対象と同じ空間を共有し、見つめ続けていくうちに、「死」よりも「生きていた痕跡」の方がよく見えてくるようになりました。

「鳥」は無数の羽が重なり合うことでできる胸のふくらみや量感、透き通った色合いは意図してそのような形になったのではなく成長していくうちに自然にその姿になっていく、その生きていた痕跡が美となっているように感じます。



▲伊達展でのギャラリートークの様子
会場はだて歴史の杜カルチャーセンターのハーバーホール。



▲NPO法人だてメセナ協会の創立20周年記念事業として行われた



▲鳥
油彩・キャンパス
45.5×53.0cm
2013



▲頭蓋骨
油彩・パネル
41.0×31.8cm
2013

それに対して「頭蓋骨」は、同じ人間ということで特に強く感情移入し見つめることができました。この頭蓋骨もかつては私と同じように生きていた人間であったということ、そして私もいつかこの頭蓋骨と同じように死ぬということ。それは生きているものはいつか必ず死ぬという誰もが知っている当たり前のことなのですが、その事実を改めて実感した時に、「なぜ私は生きているのだろうか?」、「何のために生きているのだろうか?」、「なぜ絵を描くのか?」など様々な疑問が湧いて出てその度に考えさせられました。

それは今の私にはまだ明確には答えを出すことは出来ず、今後も考え方が変わっていき、一生答えの出ない問いかもしれませんが、それでも「死」と目をそら

さずに向き合うことで、今の「生」を輝かせることができるように思います。

死を思うことで生きていることを考えさせる。今回、「頭蓋骨」と「鳥」を描いて生と死を切り離して考えることはできないということを強く実感しました。

生と死を見つめること、それは時に辛く過酷なことかもしれませんが、絵だけでなく人生にも同じように大切なものだと思います。今後も真摯に実直に見つめること、そして問いかけることを続け、「そこに存在している」という当たり前だけ大きな感動が誰かに伝わることを信じて絵を描き続けたいと思います。



▲札幌芸術の森美術館では永山優子氏による展示解説が行われた



▲札幌展でのギャラリートークのようす